

島根原子力発電所 2号機土捨用地新設に伴う

本郷本谷遺跡発掘調査報告書

1984年1月

島根県 鹿島町教育委員会

島根原子力発電所 2号機土捨用地新設に伴う

本郷本谷遺跡発掘調査報告書

1984年1月

鹿島町教育委員会

序

当鹿島町内では史跡佐太講武貝塚をはじめ、古浦砂丘遺跡、銅剣・銅鐸を出土した志谷奥遺跡、大規模な古墳群であることが判明した奥才古墳群など著名な遺跡が数多く知られております。

今回は島根原子力発電所2号機建設に伴う土捨用地新設のため、佐陀本郷本谷地区で発掘調査を実施いたしました。

調査は地元で「大人の足跡」と呼ばれる窪地の周辺で掘立柱建物などを検出して終了しました。これらの遺構の時期や性格など不明な点もありますが、当町内では中・近世の生活址の調査をはじめて実施することができました。

ここに発掘調査に対して、ご指導をいただいた島根県教育委員会、また終始ご協力いただいた中国電力株式会社をはじめとした関係各位に心から謝意を表して報告書発刊のごあいさつとさせていただきます。

昭和59年1月

鹿島町教育委員会

教育長 加納益雄

例　　言

1. 本書は鹿島町教育委員会が中国電力株式会社の委託を受けて実施した島根原子力発電所2号機建設に伴う本谷土捨用地内、本郷本谷遺跡の発掘調査の記録である。
2. 発掘調査は途中一時中断を含め昭和58年5月17日から8月29日の間、延べ60日を費して実施した。
3. 遺跡は島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷字蛇浜2958-2番地他に所在し、調査は以下の体制で行った。
事務局 井上 穂(鹿島町教育委員会教育次長)
曾田 稔(同 社会教育主事)
調査員 赤沢秀則(同 嘱託)
4. 調査にあたっては中国電力株式会社、アイサワ工業株式会社、株式会社佐藤組、株式会社八雲建設コンサルタントの協力があり島根県教育委員会文化課係長勝部昭、同主事卜部吉博、松本岩雄の3氏からは指導をいただいた。記して謝意を表したい。
5. 本書に用いた方位は第4図を除いて全て真北を示す。
6. 本書の編集・執筆は直接調査を担当した赤沢があたった。

目　　次

I	調査の経過	1
II	位置と歴史的環境	2
III	調査の概要	4
1.	試掘調査	6
2.	発掘調査	8
3.	A 区	8
4.	B 区	19
IV	小 結	25

I. 調査の経過

昭和57年4月20日の島根県土地利用調整会議の議題となった中電原発2号機増設に伴う造成工事については、当該地に遺跡の存在する可能性があるので遺跡有無の確認調査の必要ありとの県教委通知（昭和57年4月26日付）があった。これを受けた鹿島町教委は、昭和57年6月から7月中旬にかけて数次にわたり、県教委担当者とともに遺跡分布確認調査を実施し、資材運搬道路予定地内で遺跡を確認した（発掘調査実施、『氏穴遺跡発掘調査概報』として昭和58年3月発刊）。しかし、本谷土捨場予定地については、下草の繁茂が著しく、下草の枯れる時期を待って再度分布調査を実施する旨、中電と町教委で約していた。この合意に沿って中電から同年11月22日付で分布調査依頼があり、翌58年1月19日から24日までの4日間を費して分布調査を実施した。その結果、遺構の存在が推定される平地数ヶ所を確認し、県教委の指導も得て、一部試掘も含むさらに詳細な分布調査を実施することとし、中電の了解も得て、2月3日から17日まで約2週間をかけて10m³程度の調査区を13ヶ所設定し、115m³を試掘調査した。その結果、7ヶ所の調査区で遺構を検出し、再び県教委の指導を得て、当該地

を遺跡と認めた。この結果をもとに中電と再び協議したところ、現地は事業予定地内の中央で計画変更は無理との結論にいたり、発掘調査を実施することとした。こうして中電から2月23日付遺跡発見届出書及び3月15日付遺跡発掘届出書の提出を得、鹿島町教委も4月13日付発掘通知書を提出し、町教委の都合で途中約1ヶ月の休止を含むが5月17日から8月29日までの実働60日をかけて発掘調査を実施した。



第1図 本郷本谷遺跡位置図

II. 位置と歴史的環境

位 置 本郷本谷遺跡は、島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷字蛇バミ 29
58-2番地他に所在する。この地点は四方を急峻な山地に囲まれた平地であり、恵雲地区に流れ出す小川が深い谷を刻んでいる。遺跡の標高は75~80mにかけてであるが、四方を山地にふさがれているため、眺望は極めて悪い。最近までわずかな平地を谷水田として耕作していたようで、廃棄された水田が荒地となって谷川沿いに残っている。

縄文時代 周辺に目を転じると早期末から中期にかけての佐太講武貝塚があり、条痕文、爪形文などの文様をもつ縄文土器をはじめ、石器・骨格器などが採集されている。^{注1}

弥生時代 前期からの集落跡と推定される佐太前遺跡、銅鐸2・銅剣6を出土した志谷奥遺跡が知られている。^{注2}さらに日本海岸の砂丘下には、^{注3}



第2図 本郷本谷遺跡と周辺の遺跡(1/50000) 1. 本郷本谷遺跡、2. 佐太講武貝塚、3. 佐太前遺跡、4. 志谷奥遺跡、5. 古浦砂丘遺跡、6. 奥才古墳群、7. 岩屋古墳、8. 寺の奥横穴群、9. 恵谷横穴群、10. 寺尾横穴群、11. 海老山城、12. 大間山城、13. 肖山城、14. 池平城

前期から奈良時代頃までの複合遺跡である古浦砂丘遺跡がある。^{注4}

古 墳 時 代 前期にさかのぼる成立が知られ、50基近い大規模な群構成をとることが知られた奥才古墳群（町教育委員会発掘調査）を始め、主体部に礎床を採用する古墳が後期前葉に至るまで築造されていることが知られている。後期になると、石棺式石室を主体部とする岩屋古墳など有力者の古墳が築かれる一方、町内各地に横穴墓が造られる。総数20穴以上からなる寺の奥横穴群が最も大規模なものであるが、整正家形の恵谷横穴群、海岸部にあり、ドーム形を呈する寺尾横穴群など多くの分布が知られてきている。^{注5}^{注6}^{注7}^{注8}^{注9}

古墳時代以降 『出雲国風土記』の著された8世紀代には、当鹿島町は島根郡と秋鹿郡にまたがり、佐陀川下流域は恵義波として記載され、一面の沼沢地であったことが知られ、さらに河口付近は恵義浜として記され集落のあったことが描かれている。^{注10}

中 世 毛利元就が尼子勢のたてこもる富田城・白鹿城を攻略するために宍道湖北岸に荒隈城を築くと、その至近距離内にある加賀莊、佐陀莊も両陣営に分かれて攻防をくり返したようである。それらの遺跡として殿山、海老山、大勝間山、芦山、池平城跡など相当の規模を有する城跡が知られている。このうち芦山城と池平城は朝山氏の築造になることが伝えられ、町教委が一部発掘調査を行った池平城跡は急峻な山地上に築かれた山城である。8郭以上の郭からなる他、主郭周辺には深い堀切を有するなどかなり大形のものである。立地から佐陀本郷の平地および恵義地区の海岸線を見張る目的で築造されたものと考えられた。また、大勝間山城のように毛利・尼子の合戦の際に戦場となり軍記物などに名前のみえるものもある。^{注11}^{注12}^{注13}

また、この当時は農・漁業の他に江角・古浦地区では製塩も行われていたことが知られている他（多久和文書）、少し時代はくだるが、佐陀浦・水之浦・おわし・加賀浦・野波浦などでは船便を利用した交易も行われていたようで（萩藩閥閲錄）、多様な生産・交易のあったことが窺え、興味深い。^{注14}^{注15}

近 世 1789（寛政元）年には清原太兵衛によって佐陀川開削がなり、宍道湖沿岸の水害が緩和されると同時に、日本海側との水運による交易が開け、この地に経済的発展をもたらし、現在に至っている。

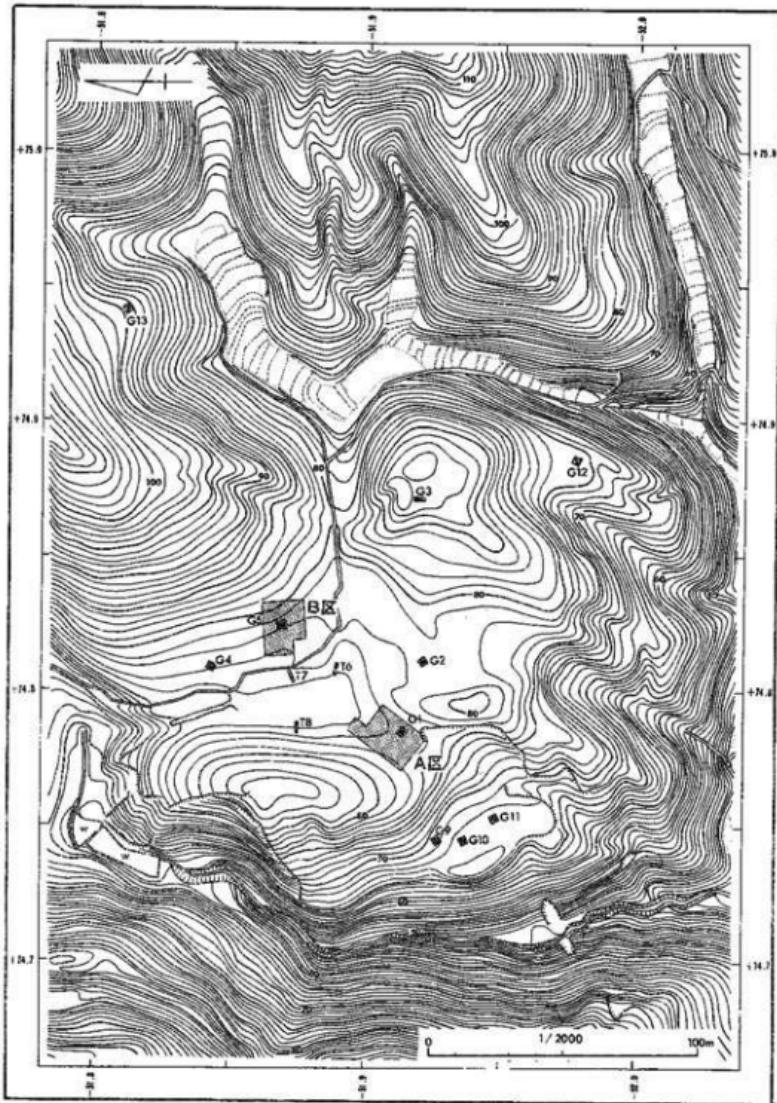
III. 調査の概要

本郷本谷遺跡は、大字佐陀本郷、大字恵曇町などにまたがる神堀山塊の中ほど、四方を急峻な斜面に囲まれた平地状の部分に位置している。この付近には谷川が複雑に入り込み、谷部を深く削り取り谷底と平地との比高は40m近くあり、変化に富む地形を見せていている。また、この谷川の水は最近まで恵曇地区の飲料水として使用されており、今も当時の水源池が残っている。

分 布 調 査 前述の平地状の部分には地元で「大人の足跡」と呼ばれる長辺50m、短辺25mの窪地があり、その周辺は堤状の盛り上がりが見られ、盛り上がりは一部では土壠状に見える部分もあり、注意をひいた。また、この「大人の足跡」周辺では若干の傾斜はあるものの、平坦面が数ヶ所にわたってみとめられ、周辺の谷部の急峻な地形と対称的で遺構の存在を推定させた。

試 挖 調 査 調査は、平地状の部分に点在する平坦面を対象として計13ヶ所の試掘調査区を設定し、115m²を発掘した。その結果、4ヶ所のグリッドから柱穴様のピットが検出され、掘立柱建物等の存在が推測された。また、G13では黒褐色土あるいは炭化物を覆土とするピット23が検出されたが、この地点は後の土工事区域からわずかに外れることが判明し、それ以上の調査は行わなかった。通称「大人の足跡」部分周辺に設けた3ヶ所のトレンチでは土層断面に明らかな盛土が認められ、この部分が、いずれかの時代に滞水を目的として土手状の堤をめぐらせた貯水池であったことが確認された。

発 挖 調 査 第2次調査は、この結果をうけて「大人の足跡」周辺のG1、G5を中心として、それぞれ325m²、275m²のA区、B区を設定して発掘調査を実施した。その結果A区では、掘立柱建物様の建物6棟の他、ピット110を検出した。掘立柱建物やピットの小穴はその殆どが黒褐色の覆土を有し、程度の差こそあれ炭化物を含んでいる。B区では、130のピットを検出したが、建物等に復元できるものはなかった。ピット覆土はA区と同様、黒褐色土がつまるものであった。



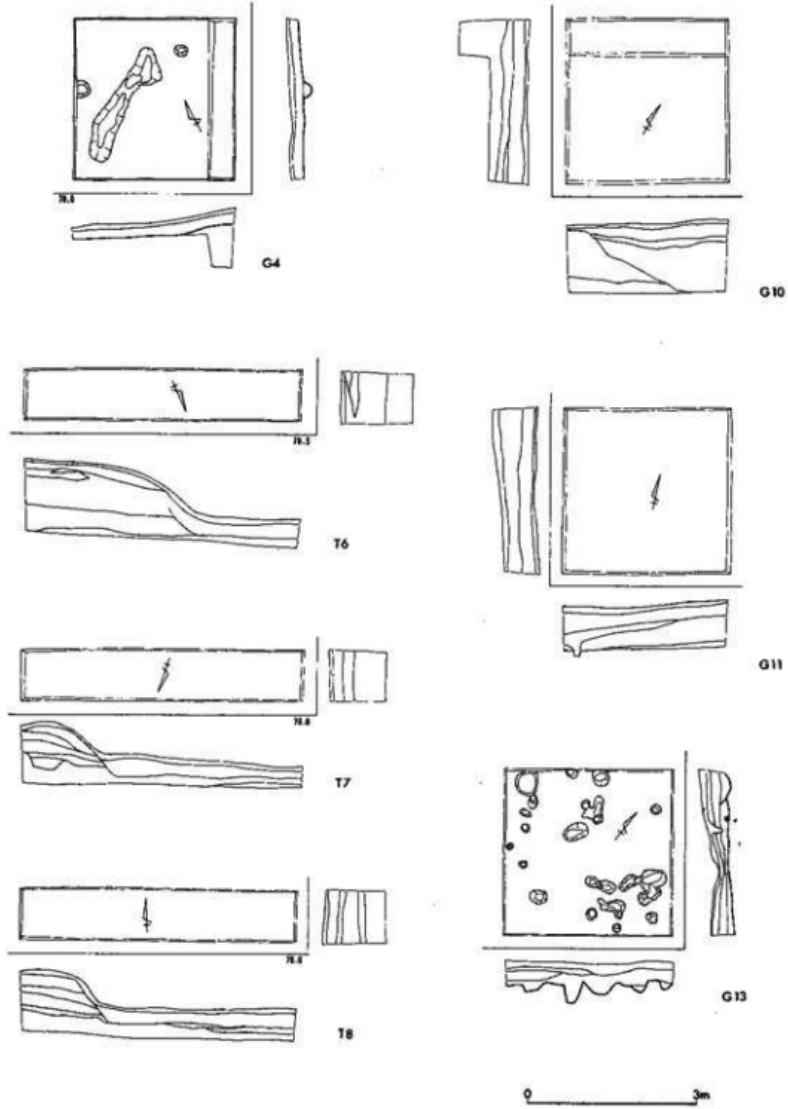
第3図 本塙本谷遺跡調査区位置図(座標系第Ⅱ系 等高線の間隔1m)

1. 試 挖 調 査

中国電力株式会社の委託を受けて鹿島町教委が実施した本谷土捨用地内の分布調査の結果、当該地内 7ヶ所に人工的な加工とも考えられる平坦地を確認した他、地元で「大人の足跡」と呼ばれる窪地の存在することを知った。この窪地の周辺には堤状の盛り上がりが見られ注意をひいたため、一部試掘調査も含めたさらに詳細な分布調査を実施することとした。こうして 7ヶ所の平坦地に 3×3 m のグリッド 10ヶ所、「大人の足跡」周辺に 5×1 m のトレンチ 3ヶ所を設定して試掘した。その結果、7ヶ所の調査区で遺構を確認し、当該地は遺跡と判断せざるをえないとの結論に達した。

遺構の確認できた試掘調査区の概要は以下の通りであるが、のちに全面的に発掘調査を実施した G1、G5 については省略する。

- G 4 表土から 25 cm で赤褐色の地山となる。この面に長さ 230 cm、幅 40 cm の溝状遺構が検出された。深さは 20 cm を測り、黒褐色土が詰まる。他に径 20 cm と 30 cm のピット 2 があり、覆土は溝状遺構と同様である。
- T 6 断面に堤状の盛土が確認できるが、盛土の一層である砂質の赤褐色土層が窪地の中へ流れこんだ状況を呈している。
- T 7 4 層に重なる土層が確認でき、この堤状の盛土は基盤層の粘土を掘り込む窪地のラインと一致している。その他、盛土する以前に掘られたピットが断面で確認できた。
- T 8 やはり 4 層に重なる土層が確認でき、ここでは基盤層が低く、窪地の底から盛土が始まっている。
- G 10 この付近では明瞭に平坦面が確認できていたが、表土下 120 cm でも基盤層は確認できず、地山の崩壊したバラスを多く含んでいる。
- G 11 表土下 80 cm で地山と考えられる赤褐色土層にいたる。調査区北西隅で断面に落ち込みが見えるが、砂質土のつまるもので遺構とは判断できなかった。
- G 13 表土下 40 cm で炭化物を多く含むピットが多数検出されたが、規則的に並ぶものはない。
- いずれの試掘調査区でも出土遺物はなかった。



第4図 試掘調査区実測図(1/100)

2 発掘調査

発掘調査は試掘調査区で検出された黒褐色土のつまつたピットの性格を追求するため、G 1 および G 5を中心として実施することとした。調査区は「大人の足跡」部分の南西に設けたものをA区、東に設けたものをB区と呼んで5m方眼に杭を打った。A区は平坦地に瘤状に隆起する2つの小丘に挟まれる鞍部に存在する平坦面で、B区は本谷を抱む山塊のうち160mの山頂が「大人の足跡」東側で傾斜をゆるやかに変えてつくる緩斜面に位置する。

A区はこの5m四方の調査区を13、A区は11設け、計600m²を発掘することとした。調査区設定ののち、若干周辺の地形も含めて100分の1で地形測量を行い、発掘調査を開始した。

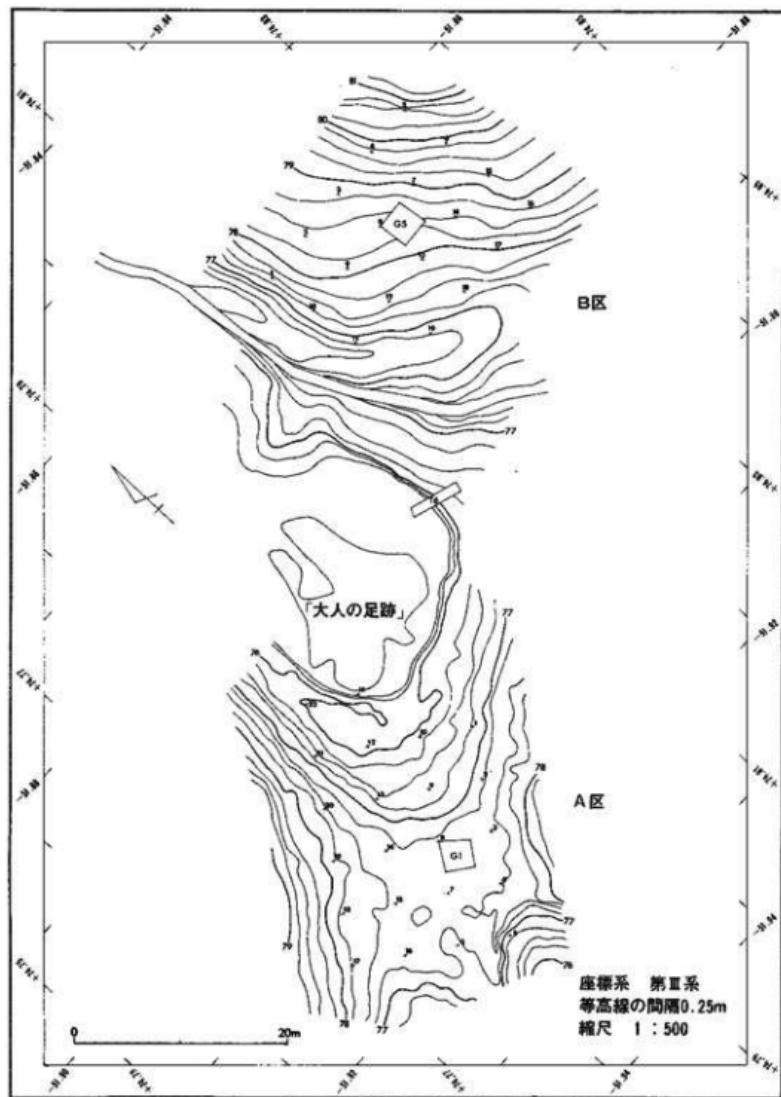
発掘は5m方眼の杭を結ぶ線を軸として残し、土層観察を行なながら掘り下げた。

3 A区

調査前の地形は標高7.7.5m前後で平坦面をなし、北側でなだらかな傾斜となつてくだり、「大人の足跡」の部分で段をつけて疊地にいたつている。疊地の底は7.5.5m前後ではほぼ等しい。東西はそれぞれ隣接する小丘のため、ゆるやかにのぼっている。南はかなりの急傾斜でくだってゆき、下方のG 9・10・11の試掘調査区のある平坦面にいたる。

調査はこの平坦面に20×15mの調査区を設け、「大人の足跡」部分も若干含めうるように調査区北側で5×5mの方眼1つを張り出すような形に設定して実施した。この区の調査面積は325m²である。

この調査区は試掘調査時に設定したG 5の1辺を基準として設定した。G 5で確認していたピットは後述する掘立柱建物5の柱穴の1本と確認できた。しかし、この際建物6の柱穴2本を不注意にも掘りとばしていること、地山面以下までも掘っていることが判明した。

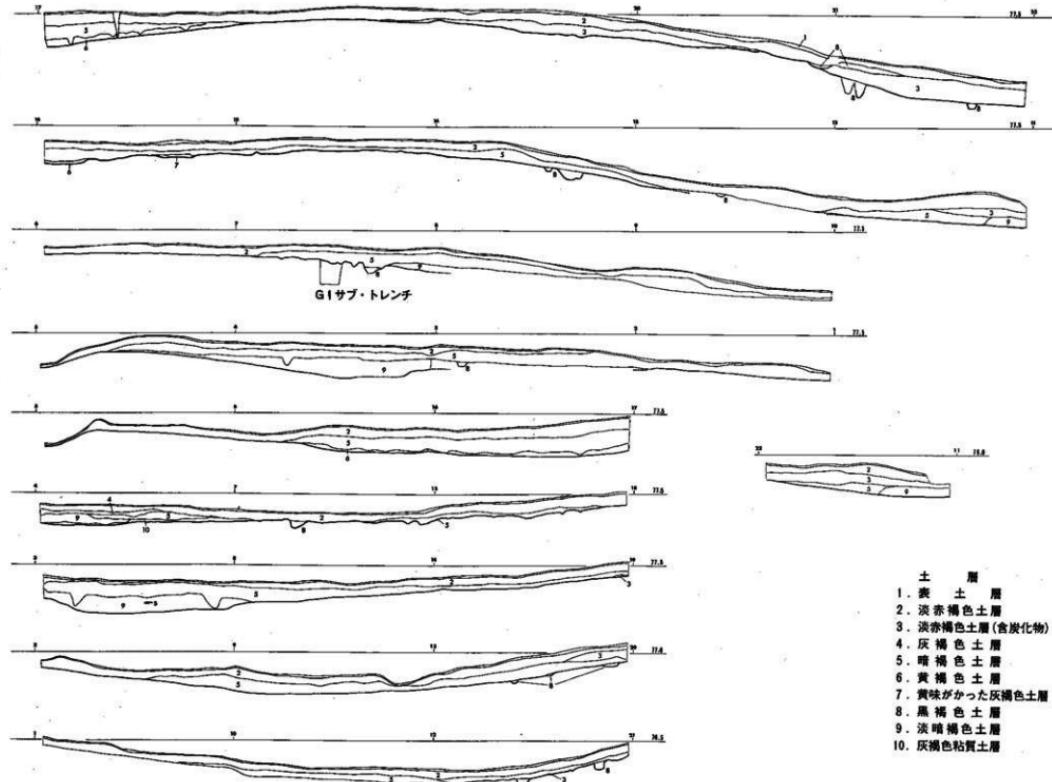


第5図 本郷本谷遺跡調査前地形測量図

A 区 土 層

A区土層は、最上層に薄く腐葉土からなる表土層(1)が堆積し、その下層に淡赤褐色土層(2)が殆どまんべんなく堆積している。調査区南側ではこの淡赤褐色土層(2)の下層は明赤褐色の地山となるが、南西から北東にかけては調査区を斜めに横切るように幅広く帯状に暗褐色土層(5)が堆積している。この層内には角礫が多く含まれている。調査区北側では、この暗褐色土層の上面に淡赤褐色土層(3)がのるよう堆積している。この暗褐色土層(5)と淡赤褐色土層(3)はいずれも層内に炭化物を含んでいる。(3)層の上層には部分的に黒褐色土層(8)の堆積があり、後述するピット群はこの(3)層の下層および(5)層中に掘り込まれている。よって調査は(5)層中でピットが確認できた面で、それ以上掘り下げるのはやめて遺構の検出につとめた。しかし、ピット等の遺構の見つからなかった調査区南西および南東部分ではさらに地山面まで掘り下げて遺構の存在しないことを確認した。この2地点では(5)層の下層は南西部部分で黄褐色土層(6)、南東部分では淡暗褐色土層(9)と部分的に灰褐色粘質土層(10)が堆積している。

「大人の足跡」に隣接する調査区北端部では、試掘調査時と同様に土層断面に堤状の土盛りが見られる。この土層の堆積から堤状の部分の土盛りは、ピット群の上層の赤褐色土層(3)や暗褐色土層(5)を削って盛ってあり、堤状の部分はピット群よりも後代のものであることが判明した。さらに土手状の盛土部分の下層にもピットが掘り込まれており、ピット群を埋めるようにして盛土されていることも判明している。しかし、この部分では試掘調査地点ほど明瞭に堤状の土盛りの土層は確認できなかったが、堤上面での標高はT 5.9 mとT 6の7.6.0 m、T 7の7.5.9 m、T 8の7.5.7 mとほとんど等しく、蓄水を目的としての土手であるとの推測をより補強している。この部分では7.6.0 mのセンターが大きく突出しており、変形を受けながらも土手が痕跡として残っていることが調査前から窺えていた。この土手が土盛りされる以前、平坦面にピット群が掘られた時期には、平坦地からなだらかにくだる斜面をへて擂鉢状の窪地であったと考えられる「大人の足跡」へ至っていたようである。



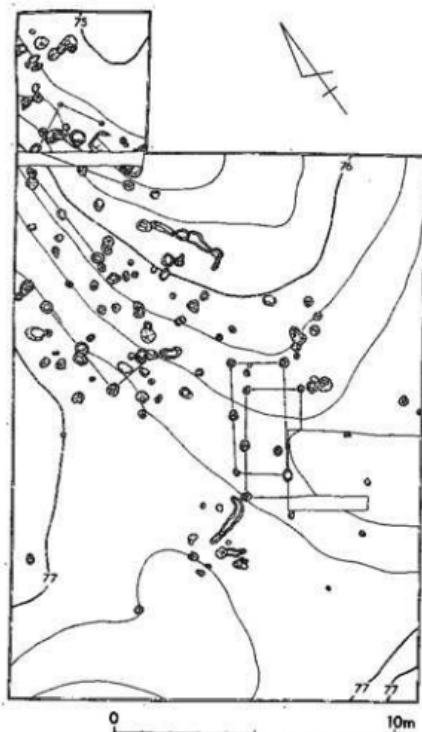
- 土 层
1. 表 土 層
 2. 淡赤褐色土層
 3. 淡赤褐色土層(含炭化物)
 4. 灰 極 色 土 層
 5. 雜 褐 色 土 層
 6. 黄 褐 色 土 層
 7. 黄味がかった灰褐色土層
 8. 黑 褐 色 土 層
 9. 淡暗褐色土層
 10. 灰褐色粘質土層

0 5M

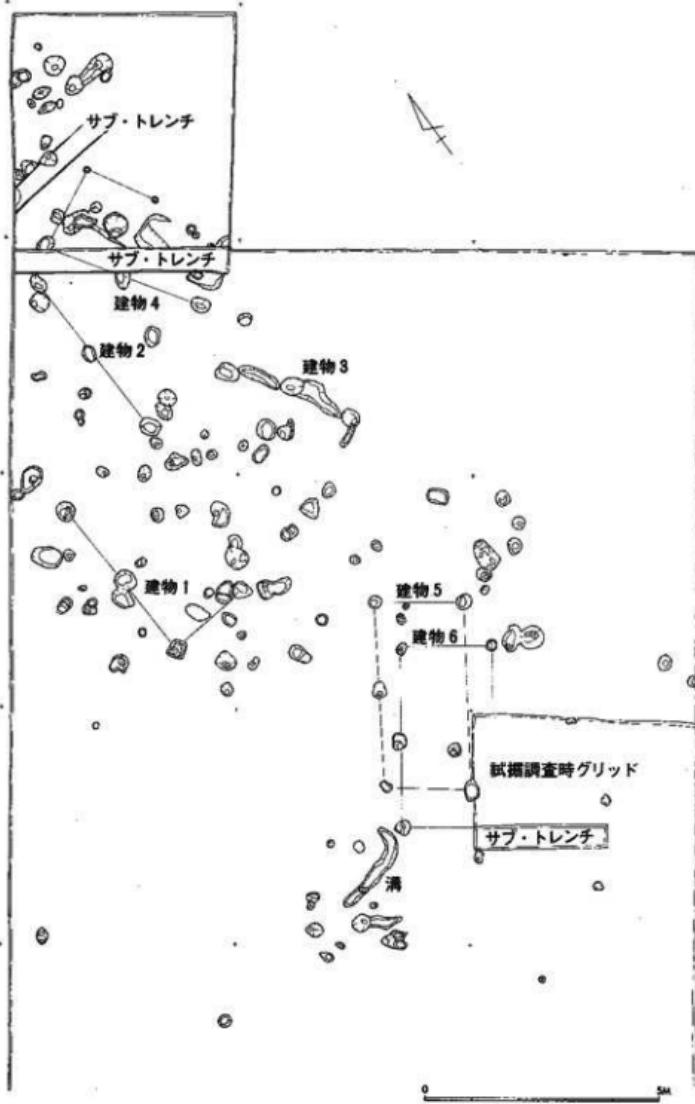
第6図 A区土層図
(1/100)

調査後の等高線は平坦面の部分では調査前とそれほど変わらないが、「大人の足跡」へくだる部分では、調査前が堤状の部分で盛り上がっていたが、盛土下では低地に向かってゆるやかにくだっている。平坦地から窪地にかけての傾斜の部分にピット約130が検出された。ピット群は調査区北側の斜面に特に集中している。このうち掘立柱建物となると考えられたのは6棟である。しかし、斜面に柱穴が掘られているため、下方では柱穴が確認できないものが多い。掘立柱建物で規模の判明するものは、いずれも2間×1間のもので主軸をほぼ南北にとるもの2棟、建替えと考えられるもの2棟が認められた。その他、柱穴間に溝を掘り、壁状の施設を作りつけていたと考えられるものが1棟ある。建物には復元できなかったが、多くのピットがあり、その覆土は建物となったピットと何ら変わることろがなく、他にも何棟かの建物の存在した可能性がある。

調査区南西では溝状遺構が検出されている。この覆土には他のピットと異なって暗褐色土が詰まっている上に炭化物・焼土等を著しく多く含んでおり、注目された。また、調査区内南側では扁平な板石3が検出されており、あるいは柱の礎板や根石等に使用されたものかとも考えられたが、柱穴等は伴わず、確認するまでには至らなかつた。これら遺構の検出できた面は調査区東側では角礎を多く含む暗褐色土に掘り込まれているが、その他の地点では地山と考えられる淡赤褐色土に掘り込まれている。暗褐色土に含まれる角礎は本谷地内各所で認められる岩盤と同様の石材で、建物を建てるためにあたって整地を行っている可能性がある。

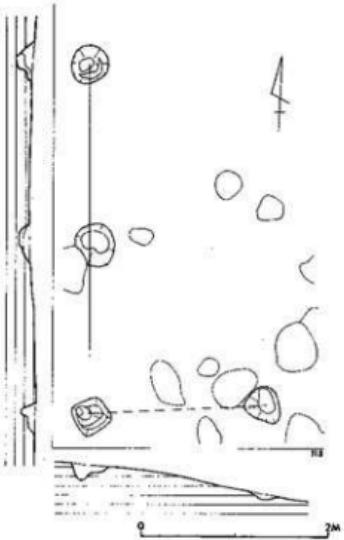


第7図 A区調査終了時地形測量図(1/200)



第8図 A区平面図(1/120)

建 物 1



調査区中央北西寄りで検出された。桁行2間、梁間1間の建物と考えられる。建物の規模は、桁行375 cm、梁間190 cmを測る。東側柱穴列は斜面の下方に位置するため、残存状態は悪く、1本しか検出することができなかった。この東側柱穴列の1本も西側のものとはレベルがかなり異なり、本当に伴うものかどうか判断しかねた。ただピット内覆土はいずれも黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。柱穴掘り方の平面形は不整な円形を主としており、うち2本はわずかに2段掘り状を呈している。柱痕跡などは認められなかった。建物の長軸の方向はN-2.5°-Wとほぼ真北を示す。

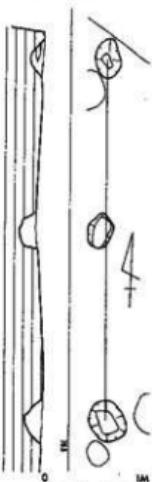
第9図 建物1平・断面図(1/60)

建 物 2

建物1の北東約250 cmの位置で検出された。斜面に位置するため東側の柱穴列は検出することができなかった。また、建物北側は調査区外に延びる可能性があるが、桁行2間、梁間1間の建物であったと考えられる。桁行は385 cmで桁行の柱間は北から180 cm、205 cmを測る。柱穴掘り方の平面形は不整な円形を呈し、覆土は炭化物を多く含む黒褐色土である。柱痕跡などは認められない。

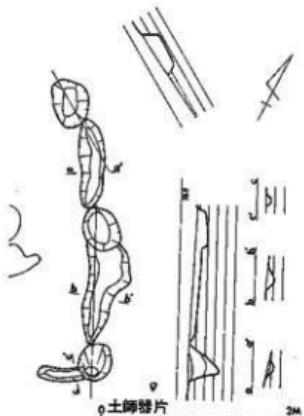
建物の長軸の方向はN-2.5°-Wとほぼ真北を示し、建物1と全く平行する。建物は斜面の傾斜に直交するように主軸を設けているため、建物1・2ともに主軸は等高線に平行する。

建物1の検出面の標高は約7.6.8 m、建物2は7.6.2 mで、建物1の方がわずかに高い地点に位置する。



第10図 建物2平・断面図(1/60)

建 物 3

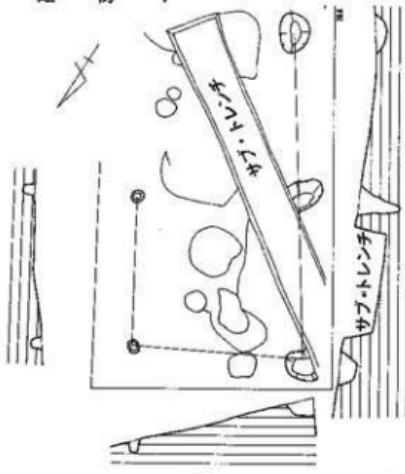


第11図 建物3平・断面図(1/60)



第12図 出土土器
実測図(1/3)

建 物 4



第13図 建物4平・断面図(1/60)

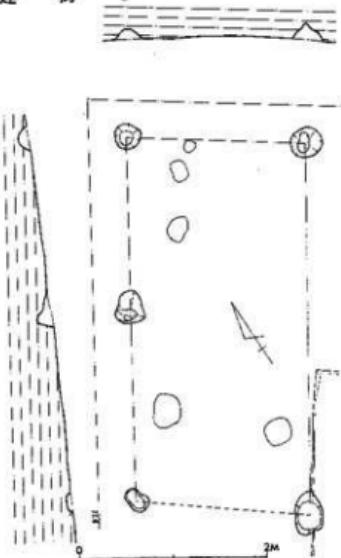
調査区中央北東寄り、建物2の東150cmの位置で検出された。ここでも斜面のため東側の柱穴列は検出できていない。建物は桁行2間のものである。規模は、桁行290cmで桁行の柱間は北西から140cm、150cmを測る。柱穴掘り方の平面形は不整な円形を呈し、覆土は炭化物を多く含む黒褐色土で柱痕跡などは認められないが、南東のものが最も深く、土層中に間層を有する。さらに柱の間は溝が掘られてつながっている。壁材をうけるための構造であろう。南東の柱穴からは、柱間の溝と直交する短い溝が派生している。この溝の覆土は柱穴と同様、黒褐色土が堆積している。

建物の主軸はN-33°-Wである。南東の柱穴の東60cmで土師質土器片が検出されている。

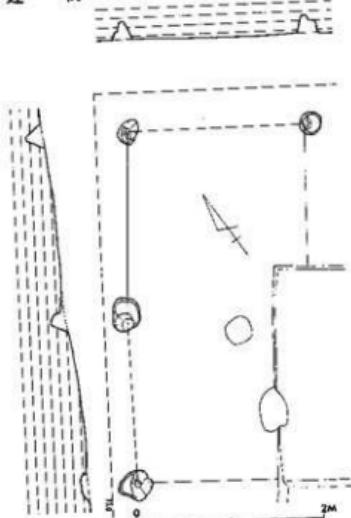
土師質土器片は壺形土器等の体部の破片と考えられるが、風化著しく調査等は観察できない。胎土は粗砂を多く含み、焼成不良で淡黄褐色を呈する。

調査区北側、建物2の北東60cmで検出された。桁行2間、梁間1間の建物と考えられる。建物の規模は、桁行355cm、梁間180cmを測る。東側柱穴列は斜面の下方に位置するため、柱穴は2本しか検出できず、浅い。この東側のものとはレベルがかなり異なり、本当に伴うものかどうか判断しかねた。ただピット内覆土はいずれも黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。柱穴掘り方の平面形は不整な円形を主としており、建物の長軸の方向はN-34°-Wを示している。

建 物 5



建 物 6



調査区は中央で検出された。桁行2間、梁間1間の建物と考えられる。建物の規模は西側桁行で390cm、東側桁行で395cm、梁間190cmを測る。西側柱穴列桁行の柱間は北東から190cm、200cmである。梁間の柱間は北で190cm、南で185cmを測る。東側柱穴列の中間の柱穴は検出できなかった。ピット内覆土はいずれも黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。柱穴掘り方の平面形は不整な円形を呈している。柱痕跡などは認められない。

建物の主軸はN-32°-Eであり、建物6とはほぼ平行する。

第14図 建物5平・断面図(1/60)

調査区は中央、建物5と重複するようにして検出された。桁行2間、梁間1間の建物と考えられる。建物の規模は桁行で375cm、梁間190cmを測る。西側柱穴列の南方は、試掘調査の際のグリッドにより、柱穴を確認することができなかった。ピット内覆土はいずれも黒褐色土で炭化物を多く含んでいる。柱穴掘り方の平面形は不整な円形を主としており、建物の長軸の方向はN-36.5°-Eを示している。建物5・6はその位置関係から建替えが想定できるが、新旧関係は不明である。

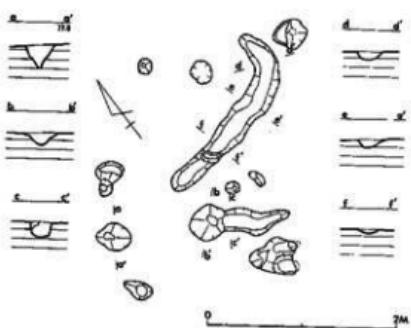
第15図 建物6平・断面図(1/60)

溝 な ど

調査区内の中央南西寄り付近が小高い平坦面になっているが、この部分に溝1とピット9が集中して検出された。溝は建物6の南西隅の柱穴と隣接している。

溝は平面「く」の字を呈し、全長約210cm、幅約30cmであり、検出面からの深さは約10cmである。溝底は平らな面となる。覆土は暗褐色土であるが、炭化物の他に焼土など著しく多く含み注目された。

ピットaは溝の西65cmで検出され、直径37cm、検出面からの深さ25cmを測る。覆土は暗褐色土で、炭化物・焼土を多量に含んでいる。ピットbは溝の南25cmに隣接し、直径40cm、検出面からの深さ13cmを測る。覆土は暗褐色土で、炭化物・焼土を多く含む。このピットbの南東から短い溝cが派出している。長さ70cm幅25cmを測る。検出面からの深さは16cmである。覆土はピットbと同様炭化物・焼土を多く含む暗褐色土である。



第16図 溝等平・断面図(1/80)

これら溝やピットは、調査区内の他のピット覆土が黒褐色を呈するのに対し、暗褐色土がつまり異なっている。また、覆土中に多量の炭化物・焼土を含んでおり、その性格等は不明であるが、これらの溝・ピット内で火が燃やされたことは歴然としている。

4. B 区

調査前は、8.0.5 mから7.6.5 mにかけてのゆるやかな斜面であり、調査区の下方から帯状に高まる部分をへて、「大人の足跡」に至っている。この帯状に高まる部分が、窪地周辺に設けられた堤状の土手である。この付近で土手は保存状態が最もよい。

調査は、この緩斜面におおよそ 20×15 mの調査区を設定して実施した。この区の調査面積は275 m²である。

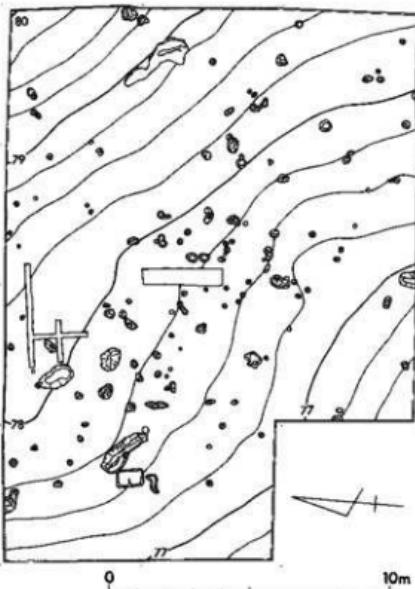
土層は、比較的単純で最上層に薄く腐葉土の表土層(1)が堆積し、その下層に淡赤褐色土層(2)がほとんどまんべんなく堆積している。

調査区南東側では、この(2)層の下に暗赤褐色土層(3)が堆積している。この(2)・(3)層の下が明赤褐色の地山となっている。その他、調査区北東隅で赤褐色土層(4)がわずかに(1)・(2)層間にレンズ状に含まれるが、これは調査前に見えていた後世の削平による擾乱と考えられた。

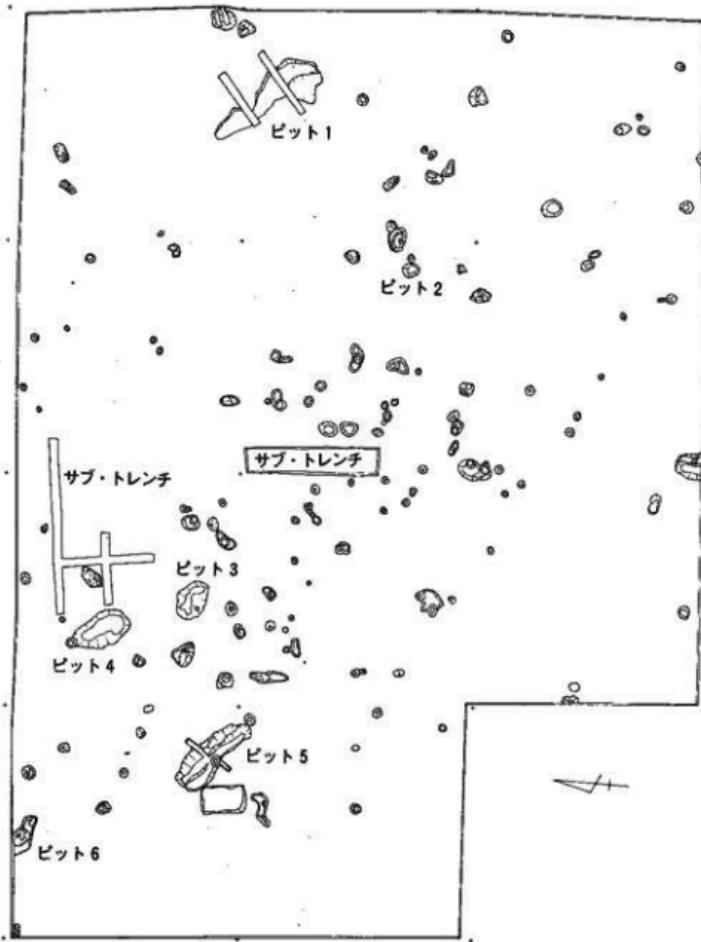
擾乱は地山までには及んでいない。後述するピット群は、地川に掘り込まれており、黒褐色土(5)を覆土としている。土層は全体に薄く、調査区内では、堤状の土手盛土などは認められなかった。

調査後の等高線は、いずれも調査区を南東から北西に斜めに横切るように走っている。ピットは調査区中央やや西寄りでわずかにセンターが開いて、傾斜がゆるまる地点に特に集中して検出された。全体に調査区南東および北西隅をむすぶ対角線上に多く検出されている。ピットは約130を数える。

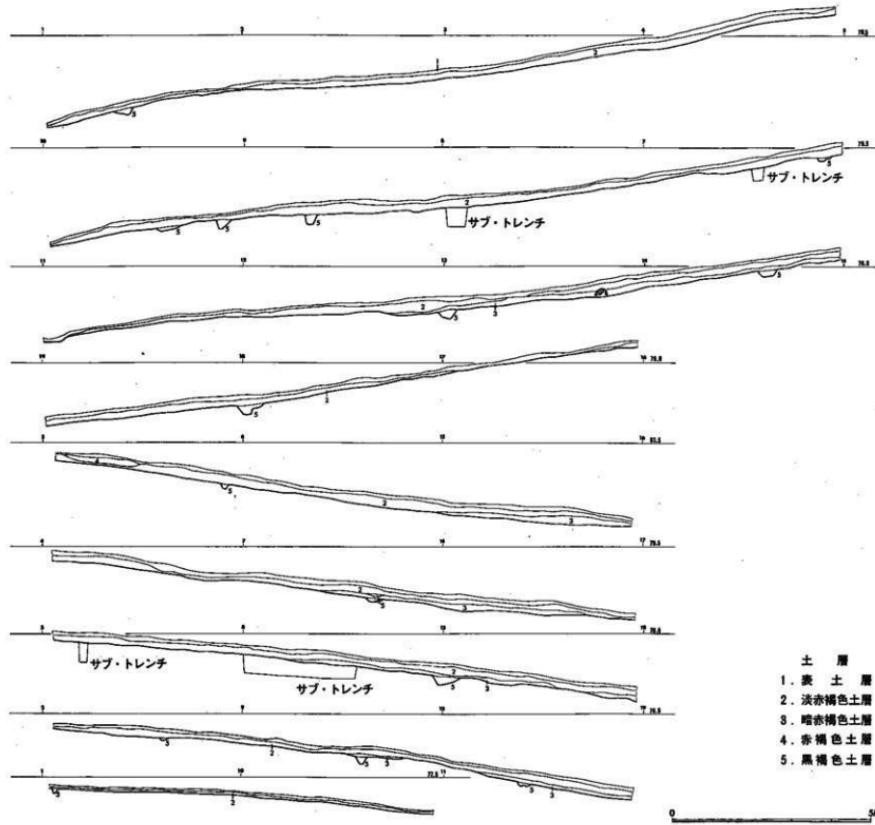
B区ではピットから建物などは復元できなかった。転石もかなり大形のものを検出したが、遺構にはともなわない。石質は本谷地区内各所で認められる岩盤と同様の石材と考えられる。



第17図 B区調査終了時地形測量図 (1/200)

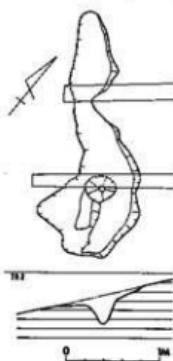


第18図 B区平面図(1/120)



第19図 B区土層図(1/100)

ピット 1

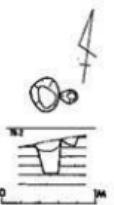


第20図 ピット1平・断面図(1/60)

調査区東端付近の緩斜面で検出された溝状遺構とでも称すべきものである。長軸を等高線に平行させている。

これは長辺260 cm、幅は南東付近で最大となり110 cm、北西付近で50 cmを測る。地山に掘り込まれており、暗黄褐色土を覆土としてこの覆土中には炭化物を少量含む。調査は幅約15 cmのサブトレチを2本設けて、土層を観察しながら掘ったが、ごく浅いものであった。ピットの底面は標高7.8.5 m前後ではほぼ平坦な面となる。ピット南東部床面から、さらにピットが掘りこまれている。約半分をサブトレチで壊したため、正確ではないが、直径33 cm、検出面からの深さは25 cmを測る。底にいたるにしたがって小さくなる逆砲弾形を呈するピットである。このピット内にも炭化物を含む暗黄褐色土がつまっている。この覆土は他のピット覆土と異なっている。ピットの性格等は不明である。

ピット 2



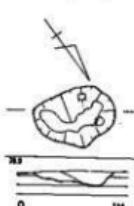
第21図 ピット2平・断面図(1/60)

調査区中央東寄りで検出したピットで、大小2つのピットが隣接している。ピット上縁は標高7.8.0 mである。

ピット大は直径30 cm、検出面からの深さ38 cmを測る。底面は平面不整な円形を呈し、断面では底面からほぼ垂直に立ち上がる掘方である。ピット小は直径20 cm、検出面からの深さ10 cmを測る。

ピットは大小ともに黒褐色土を覆土とし、炭化物を多くまじえている。ただし、ピット大では黒褐色土下層は黄褐色土がつまっている。この土層中にも炭化物が多く含まれている。

ピット 3



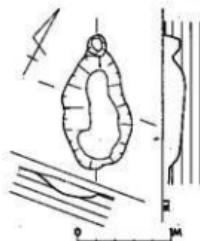
第22図 ピット3平・断面図(1/60)

調査区中央北西寄りで検出され、小判形の平面形をとる。このピット付近は、緩斜面がさらにゆるやかになる地点で、等高線の間隔が最も広くなり、特にピットが集中して発見されている。ピット上縁は標高7.7.8.5 mである。

ピットは長辺88 cm、短辺66 cmの若干歪んだ長楕円形を呈する。検出面からの深さは最も深い部分で16 cmを測るが、床面のレベルは一定ではない。

覆土は2層からなり、淡黄褐色土層を切るようにして暗褐色土層が堆積している。この2層中の炭化物はごく少量である。

ピット 4 調査区北端やや西寄りのゆるやかな斜面にあり、ピット 3 の北西 100cm の地点で検出された。ピット上縁の標高は 7.8.0m である。

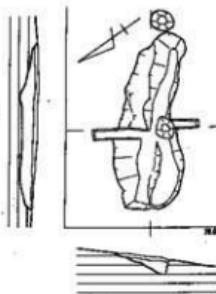


第23図 ピット4平・断面図 (1/60)

ピットは長辺 143cm、短辺 7.3cm の歪んだ長楕円形の平面形を呈し、北西端部に小形のピット 1 が隣接している。ピットは地山に掘りこまれており、検出面からの深さは 1.3cm を測る。床面は比較的平らな面となっている。

隣接する小ピットは直径 2.4cm の平面円形をなし、検出面からの深さは 1.7cm を測る。床面は平面となり、壁は垂直に近い。両ピット覆土は淡黄褐色土 1 層のみで、わずかではあるが炭化物を含んでいる。

ピット 5 調査区西寄りの平坦な部分がわずかに傾斜をもつはじめる地点にあり、ピット 4 の南東 280cm に位置している。ピット上縁の標高は 7.7.7m である。



第24図 ピット5平・断面図 (1/60)

ピットは長辺 190cm、短辺 7.2cm を測り、平面形は歪んだ長方形形状を呈する。南東に小形のピット 1 が隣接する。ピットは地山に掘りこまれたもので、検出面からの深さは 2.0cm を測る。床面は多少の凹凸はあるものの平面となる。検出面では墓域等の遺構を想定したが、下部で幅が著しく狭くなってしまっており、断定するには至らなかった。覆土は 2 層からなり、上層に薄く黄褐色土、下層に赤褐色土の堆積が見られた。隣接する小ピットは直径 2.1cm の平面円形を呈し、深さ 6cm を測る。

ピット 6 調査区北西隅の斜面にあり、ピット 5 の北 310cm の地点で検出された。一部は調査区外にあるため、全容は把握できなかった。ピット上縁の標高は 7.7.7m である。



第25図 ピット6平・断面図 (1/60)

B 区では遺物は検出されなかった。

IV. 小 結

本郷本谷遺跡は谷深い険阻な地点に位置しており、遺跡の常識的な立地からはかなりかけはなれたものといわねばならない。しかし現在生い茂っている樹木がある程度伐採されてさえいれば、日照時間に不足があるとは考えられない。また、最近まで恵曇地区の水源池が存在していたことからわかるように、良質の水にこと欠くことはなく、生活に要する最低の条件は満たしているものと考えられる。

調査区周辺には「大人の足跡」と称される窪地があり、その周囲には堤状の土盛りがなされ、土盛り上端は水準高を等しくそろえており、水をたたえるための施設であると考えられた。しかし、近代に至ってこの窪地の北側谷部に水源池が造られるに及んで、堤の北側に溝が掘られ、この窪地にたまっていた水は北下方の新設された貯水池に流れこむようにされたようである。

A区では2間×1間の建物が6棟確認でき、それらは建物主軸でグルーピングが可能である。すなわち、主軸をほぼ真北に向ける建物1・2、北から約33度西へふる建物3・4、北から約35度東へふり、建替えと認められる建物5・6の3群である。この3群の建物は群毎に互いに近接しており、この分類を補強する。また、その他多くのピット群が検出されており、さらに何棟かの建物が存在していたと考えられる他、この建物群の建築にあたっては若干の整地が行われた可能性も認められた。いずれにせよ、生活遺物の出土に乏しく、建物群で日常的な生活が営まれていたとは考えにくく、2間×1間という平面形、貧弱な柱穴等を考え合わせると住居と呼ぶよりは農・林業に伴う簡単な覆屋を架けただけの作業小屋や一時的な倉庫のような施設を想定しておくのが妥当と考えられる。

B区では建物等こそ復元できなかったが、調査区南東隅から北西隅を結ぶ対角線上にある程度のまとまりをもって検出されており、性格など不明であるが、A区同様農・林業に伴う施設があったと考えておきたい。

A・B両調査区を通じて、遺物がごくわずかしか検出されなかつたこともあって時期の決定は困難であるが、出土遺物である土師質

土器は甕形土器の体部と考えられ、土師器が煮沸容器として使用された中世までの遺跡と推定しておきたい。また、窪地周辺の土盛りは土層から建物群よりおくれてなされたことが知られ、近代の水源池造成に際して破壊されており、この時期を下限として考えることができる。

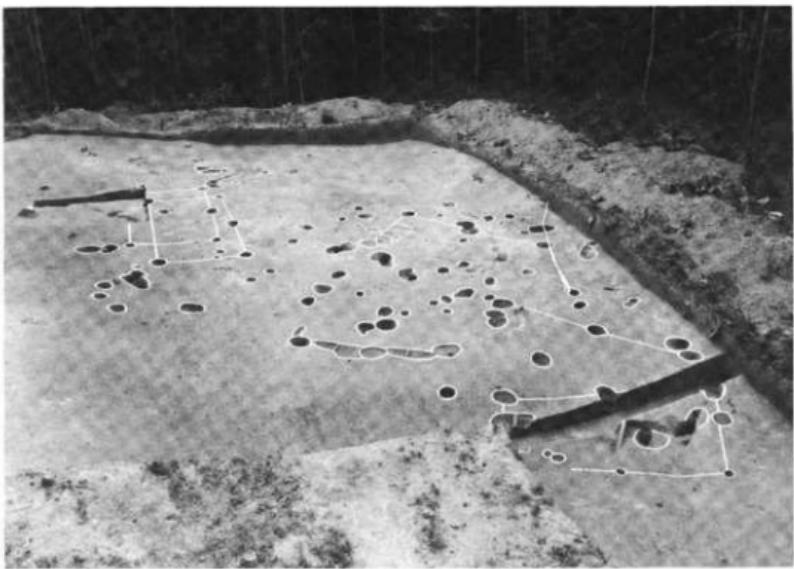
第1表 A区建物一覧表

建 物	規 模	柱間寸法(cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	棟方向	建 物	規 模	柱間寸法(cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	棟方向
		桁	梁						桁	梁			
1	2×1	375	190	190	190	N-2.5°-W	4	2×1	355	180	180	180	N-3.4°-W
2	2×1?	385	-	190	-	N-2.5°-W	5	2×1	390	190	190	190	N-3.2°-E
3	2×1?	290	-	145	-	N-3.3°-W	6	2×1	375	190	190	190	N-36.5°-E

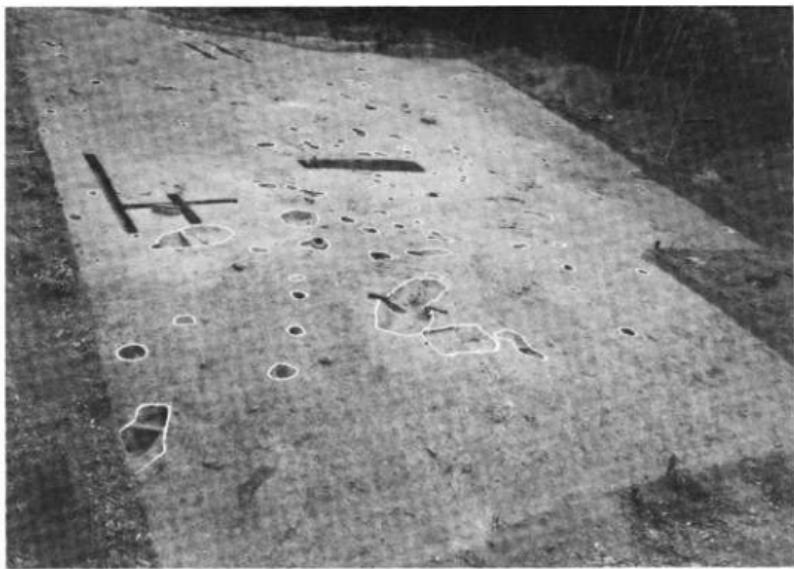
注

1. 山本清「佐太講武貝塚」(『講武村誌』 1955)
2. 山本清「佐太橋付近の弥生式遺跡」(『講武村誌』 1955)
3. 「志谷奥遺跡」鹿島町教育委員会 1976
4. 金関丈夫・小片丘彦「着色と変形を伴う弥生前期人の頭蓋」(『人類学雑誌』 69-3・4)
5. 三宅博士「島根県八束郡鹿島町所在奥才古墳群の調査から」(『考古学研究』30-2)
6. 梅原末治・石倉暉栄「出雲における特殊古墳 中ノ中」(『考古学雑誌』 11-3)
7. 「菅田考古」1.5 島根大学考古学研究会 1979
8. 「菅田考古」1.6 島根大学考古学研究会 1983
9. 1979年鹿島町教育委員会発掘調査実施。
10. 加藤義成「校注出雲国風土記」 1965
11. 「雲陽誌」(『八束郡誌』 1926所収)
12. 「氏穴遺跡発掘調査概報」鹿島町教育委員会 1983
13. 香川正矩「陰徳太平記」 1712(正徳2年)
14. 勝田勝年編「鹿島町史料」 1976所収
15. 同 上

図 版

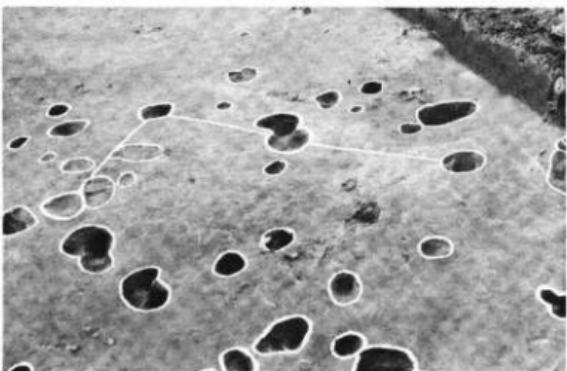


A区全景

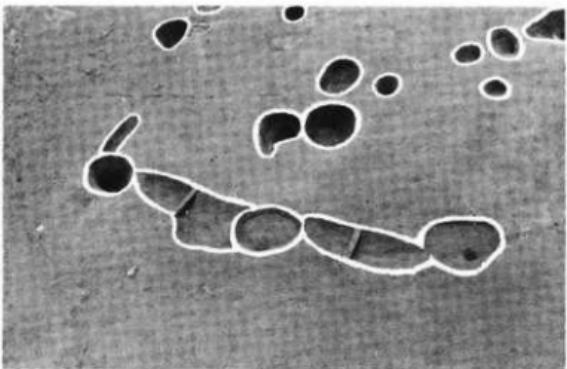


B区全景

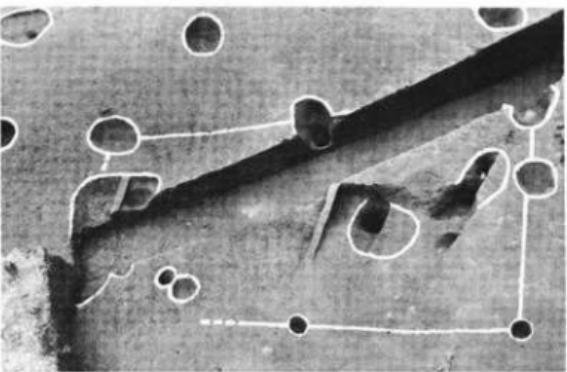
A 区 建 物 1



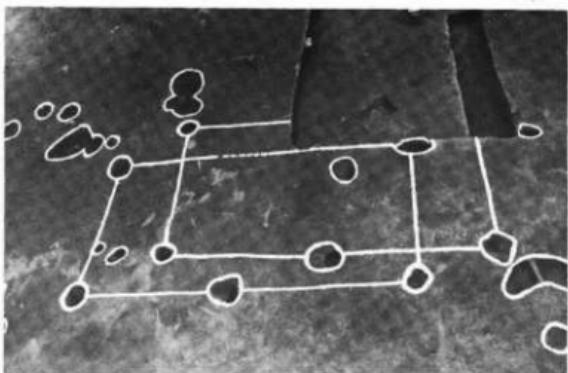
建 物 3



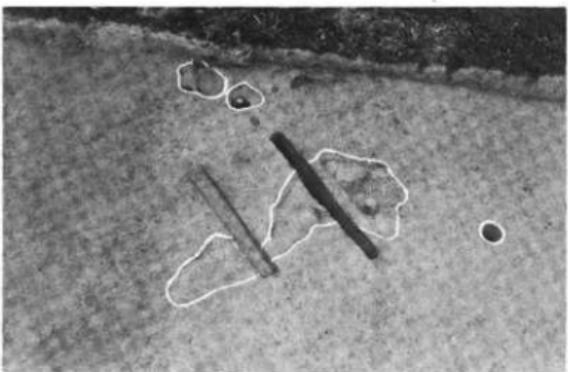
建 物 4



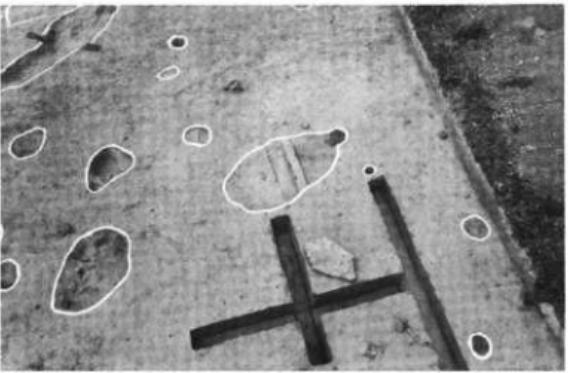
P.L. 3



建物 5・6

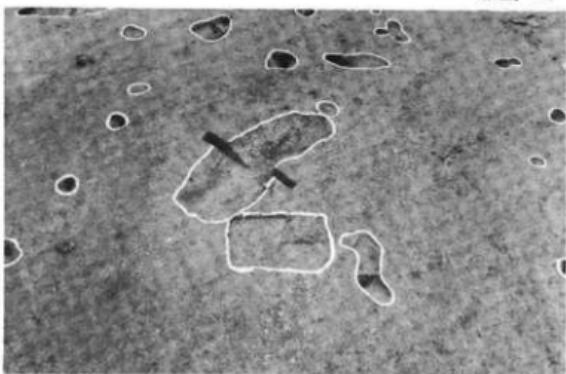


B区 ピット1



ピット4

P.L. 4



ピット 5



試掘調査 T-T 断面



試掘調査 G 13

本郷本谷遺跡発掘調査報告書

1984年1月

発行 鹿島町教育委員会

印刷 有限会社 黒潮社